

ヨーロッパ文芸批評史

ヴァーノン・ホール著
岡地嶺訳

ヨーロッパ文芸批評史

ヴァーノン・ホール 著

岡 地 嶺 訳

中央大学出版部

訳者略歴

青山学院大学文学部卒
現在、中央大学教授

著書：『英詩読本』（開文社）『英文学読本』（開文社）『ルーシー詩篇の研究』（開文社）『イギリスの詩と批評』（泰文堂）

訳書：『キーツ詩集』（文修堂）『十九世紀英米詩論集』（文修堂）ダウナー著『キーツのオード研究』（文修堂）ウッドベリー著『文学の鑑賞』（泰文堂）その他

ヨーロッパ文芸批評史

1979年4月10日 印刷

1979年4月20日 発行

定価 2,200 円

〈検印廃止〉	訳者	岡 ^{おか} 地 ^ち 嶺 ^{みね}
	発行者	佐野 幸作
	発行所	中央大学出版部

東京都八王子市東中野 742-1
電話 0426(74)2351・振替東京8-8154

©1979 岡地 嶺

印刷・大永舎／製本・菊川製本
3098-070211-4632

まえがき

想像文学については、昔から多くの人がさまざまな信念を抱いてきた。そして文明の母胎ともいふべきさまざまな思想の歴史を開いて、自然に湧いてくる思想的好奇心も、かれらの文芸理論を知ることによって、かなり満足させられた。しかしそれよりも重要なことは、文芸理論に関する知識を持つと、文学の鑑賞が、それ以外の方法ではとても期待できないほど深く、行うことができるということである。

過去に提唱された批評原理が、あらゆる時代に常に有益であるか否かは別として、時にはそれが真理であると信じられて、それに従って形式と内容が決定されたればこそ、無数の優れた文学作品が生まれたのである。したがって作家や作品を理解するためには、その時代の人たちが芸術の基礎と信じていた批評原理を知るのが一番である。

しかし文芸批評にたずさわった批評家の数は、あまりにも多い。したがってもし完全な文芸批評史を企てるならば、気が遠くなるほど長いものとなるか、あるいは実際には読めなくなるほど多くの名前と年号とを詰めこんでいくことになるう。そこで、本書のようなささやかな文芸批評史は、

各時代の代表的な文芸論を一瞥するだけで、がまんしなければならぬし、また簡潔と明瞭を期したために、各批評家の紹介が、最も重要な作品の一、二に言及する程度にとどめざるを得なかった。もちろん、これらの紹介は、それぞれの批評家の実際の論文そのものと一緒に、合わせ読まれることが理想であるから、可能なかぎり、最も読みやすい一般的なアンソロジーに収録されている論文を取り上げて、それを論じるようにしたつもりである。

本書は、このように、ささやかなものではあるが、ミルトンが「崇高な芸術」と称した文芸への入門書として、少しでも読者のお役に立てば幸いである。

ヴァーノン・ホール

訳者はしがき

二十世紀は批評の時代だといわれている。単に文芸の世界だけでなく、政治、経済、社会、文化の各世界でも、確かに批評精神の活動が見られる。しかし日本の現代は、批評の時代と称するためには、あまりにも批評精神が貧困である。文芸の世界に限ってみても、日本の批評活動は、欧米のそれに比べて、かなり相違がみられる。この相違は、日本に本当の意味での合理主義が生きていないことに原因があると思われる。現代における批評は理論に基づく実際の判断である。理論は、実際面でその真理が証明されないかぎり、価値がない。直観的本能的判断を好む日本人には、欧米の合理主義精神は、本質的になじまないのかもしれない。したがって厳格に言えば、かれらの印象主義批評でさえ、われわれには苦手なのかもしれない。理論に弱い日本人は、どうしても大勢に傾きがちであり、集団で考え、集団で判断し、集団で発言するから、いきおい、流行に敏感になりやすい。新しいものを受け入れるのに急であれば、古いものを捨てるのにも急である。だから日本的な伝統を捨てるのに理由はなく、ただそれが古いからである。欧米の文化を移入するのにも特に必然性はなく、ただそれが新しく珍らしいからである。そのような相違は、外国に少しでも暮らしたこ

とのある人なら、簡単に理解できるはずである。わずかに欧米の合理主義精神が伺えるのは、経済活動の一面のみである。それも、利益追求に迫られた反文化的行為においてのみである。

大学で文学と文芸批評を講ずるためには、まず歴史から出発する。歴史を弁えて、初めて正しい理解が生まれてくるからである。もちろん文学入門者が、歴史を知らずに鑑賞することも、方法論として可能であるし、また歴史的知識を比較的必要としない作品もあるにはある。しかし、いやしくも外国文学を鑑賞する場合、ある程度の歴史的知識は、どうしても必要である。また正しく深く鑑賞するためには、まず何よりも歴史的知識が必要なのである。したがって大学で外国文学を講ずるためには、広い歴史的コンテクストを理解することから始めなければならない。

批評は、一般に作品についての判断であると思われる。ほとんどの批評はその通りである。したがって、作品を正しく読むことさえできないうちから、批評を勉強することは本末顛倒であり、まず作品の鑑賞を行い、作品の研究を行った後で、批評を行うべきだという意見が、広く支持されているのである。これは正論であり、理屈である。しかし批評は鑑賞のためにあるのだという根本理念を忘れてはならない。批評は、文学行為の最後なのではなくて、最初なのである。文学行為の最後は、あくまでも鑑賞でなければならない。

もちろん批評を語るのに、作品について無知であることは致命的である。鑑賞行為のない批評行為はナンセンスであり、危険である。しかし鑑賞と批評は、無限につづく因果関係であって、両者

を途中で切断して、両者を無理に区別することは、全く不可能なことである。互いに相手を補いつつ、互いに深まり行く過程を、静かに味わうことが、文学行為の最良の喜びであり、最高の楽しみなのである。

本書は列伝体のヨーロッパ文芸批評史である。時代別、思想別の批評史も一つのやり方である。しかし、いかなる方法をとるにせよ、要するに理論や背景についての正しい紹介が行われていれば、それでよいのである。最後には一切が読者の努力にかかっているのである。イギリス文学、フランス文学、ドイツ文学、その他のそれぞれの文学に詳しい人は、本書のそれぞれの領域についての説明に不満を覚えるであろう。特にイギリス、アメリカ、フランス、ドイツには、豊かな批評があるから、そのような不満を覚える人も多いかと思う。ましてや批評の専門家となると、当然本書のすべてに注文をつけるかもしれない。しかし本書は批評の入門書である。しかもなかなか要領よく纏められた良書である。したがって本書を批評文学の手がかりにして、さらに深く進むように努めてもらいたい。

本訳書には、原書にない顔写真が収められている。それらの写真のほとんどは研究社の『世界文学辞典』および『英米文学辞典』から借用した。

参考書目は、原著者が列挙したもののほかに、訳者が追加したものもある。日本で出版された関係書はほとんど訳者の手許のものばかりであるから、この外にも列挙すべきものがあると思う。

原著者ヴァーノン・ホール (Vernon Hall 1913-) は、ニュー・ヨーク大学を卒業後、さらにウィスコンシン大学で文学修士、哲学博士の学位を得た英文学者で、ニュー・ヨーク大学で英文学を講じたあと、ウィスコンシン大学に移り、現在比較文学を講じる教授である。著書に『ルネサンス文芸批評』(Renaissance Literary Criticism)、『スカリゲルの生涯』(A Life of Julius Caesar Scaliger)などがある。本書の原題名は *A Short History of Literary Criticism* (New York University Press, 1963) である。

昭和五十三年十月

訳 者

Ⅱ プラトン (427-347 B.C.)



プラトン

ギリシア人はなかなかの議論好きであった。特に詩の議論にかけては、他の追随を許さなかったほどであつたらしいが、それを論じたかれらの言葉は、残念ながら、空しく地中海の潮風に吹かれて今日その跡形もない。プラトン (Plato) 以前の時代をみると、文学論という意味における本当の文芸批評は、詩人たちのわずかな言葉と、哲学者たちのわずかな断片とを除くと、他に全く存在してはいなかった。アリストファネス (Aristophanes 448?-385? B.C.) がかれの喜劇作品の中で行っている見事な文学評価も、理論的であるよりは、むしろ実際的なものであつたから、「文芸批評史を」一般的文学論から開始するとなれば、どうしてもプラトンから開始せざるを得ない。しかし、そうはいっても、もっと適当な始め方が他にないものだろうか

とも思う。なぜなら、哲学者の中で最も詩的な性格に恵まれていたプラトンが、何と詩を敵視しているからである。これは実に衝撃的な事実であって、誰もがまさかと思う。あれほど深く詩に理解を示しているプラトンが、まさか詩を裏切るはずはないと誰もが思う。

しかし事実は事実である。晩年に至ってロシアの小説家トルストイ (Tolstoy 1828-1910) が気づいたように、プラトンもまた、自分の好きな詩を裏切らざるを得ないことに気づいたのである。それは、プラトンが詩以上に偉大なものを発見したからであった。初期の時代のキリスト教指導者聖オーガスティン (Saint Augustine 354-430) がプラトンを読んで、これを利用したために、初期キリスト教会が文学を敵視する政策を強化することになったのであるし、また二十世紀には、全体主義を奉ずる政治活動家たちが——コミュニストもファシストも含めて、プラトンの思想を借用することになったのである。いわゆる「真理」を発見したと信ずる者たちは、必ずプラトンの芸術観に組する傾向がある。もしプラトンの共和国家なり、ソヴェエツト的国家なり、聖オーガスティンの神の国なりを建設することが唯一無二の関心事になると、そのような国家から文学は廃止か弾圧の運命となる。人間の不滅の魂と比べたら詩などが何であるか。階級なき社会と比べたら、詩などが何であるか、というわけである。

教育、哲学、倫理、政治、その他のいかなる問題を考察する場合でも、プラトンは常に同様な結論、すなわち詩は危険だという結論に到達するのであった。かれの中の清教徒的な気質まで

が、自ら愛するものを断念することに悲痛な満足を見出していたのではないかとさえ思われるのである。プラトンは心底から詩を愛していた。さもなければ、あれほどまでに詩を恐れるはずがなかったであろう。ドイツの小説家トマス・マン (Thomas Mann 1875-1955) は、その長篇や短篇において、芸術を時間として描いており、しかもその時間を、さらに現代中産階級の道徳を誘惑してこれを崩壊させるものとして描いているのであるが、かれの作品は、特にプラトンや詩人についての洞察に富んだ注釈である。

われわれは、長い文明の歴史を持っているから、プラトンがまだ文化の夜明けの段階の人であると考えるのだが、プラトン自身にしてみれば、文化は正に日没を迎えようとしていたように、かれには思えたらしい。偉大なことは全部成し遂げられていたし、アテネは滅亡に向かってまっしぐらに突進していた。芸術を愛する温和な地中海民族は、今やいい加減なデマに思いのままに牛耳られていた。宗教では、ホーマー (Homer 紀元前十世紀頃) の二大叙事詩に描かれている男女の神々を信仰していたのに、今や姦淫、虚言、暴力の民族に墮落している。このようなアテネ市民が必死に望んでいたものは鍛練と理性であって、これらの鍛練と理性はプラトンのような哲学者にしか期待できないものであった。

現存の詩人も過去の詩人も、プラトンにとっては同様に敵であった。詩人が教師であるということも当時の常識であったし、詩人が靈感を受けて歌うことも当時の常識であった。しかしプラトン

は、そのことだけで、詩人たちを断罪するのに充分であると思った。なぜなら、真理は理性によって求められるべきものだからである。彼は「イオン」(Ion)において有名な詩論を述べている――

なぜなら詩人とは、軽やかな、羽根の生えた、神聖なものであって、靈感を受けて正気を失い、理性が自分の中に存在しなくなつて、初めて創作に取りかかるものだからです。詩人は、こういう状態に陥らないかぎり無力なものであって、神託を語ることもできません。ホーマーについて語るあなた自身の言葉と同じように、さまざまな行為について詩人の語る高貴な言葉は無数にあるのですが、さてそれらの言葉は、詩の技術的法則に基づいて語られている言葉ではありません。詩神ミューズ(Muses)が詩人に強制的に語らせる言葉が浮かんでくるときにだけ、靈感を受けて、詩人の創作が開始されるのです。したがつてある者はバカス(Bacchus)を讃える熱狂的な詩を作り、ある者は叙事詩を作り、ある者は短長格の諷刺詩を作るのです。ある種類の詩に優れた詩人は、別の種類の詩には得意ではありません。なぜなら詩人は、技術によって歌うのではなくて、神がかりの力に動かされて歌うからです。(「イオン」)

誰の目にも明らかに高貴と思われるこのような詩論を、プラトンは詩人たちに突きつけた。戦車競技については、当然のことながら、ホーマー以上に戦車の御者の方が知識を持っている。職人

は、自分の職業について、これを語る詩人以上に知識を持っている。同様に、教師としても、詩人は専門の教師に劣る。ましてや詩人は、知識からではなく、靈感から、つまり狂気から（プラトンのとっては靈感も狂気も同じである）歌うのであるから、教師としては全く信頼できないのである。

プラトンの哲学にかかると、詩人は全く形無しである。プラトンによれば、現実（イデア）の世界にあるのであって、物質の世界にあるのではなかった。たとえばベッドについていえば、ベッドの観念というものがあって、それが真の不変のベッドである。家具屋が作る個々のベッドは、この観念のベッドの、いわば不完全な模倣である。だから詩人がベッドを作品の中に表現する場合は、かれは模倣を模倣しているわけであるから、そのベッドは、真理または真実から三倍もかけ離れていることになる。詩人の技術は、「劣等者と結婚して、劣等な子を生む劣等者」なのである。

道徳や倫理の問題では、詩人が最も信用されなかった。ホーマーの作品では、神が道徳的に悪いことをやっている。主神ゼウス（Zeus）は人間たちに幸福と不幸を与えるのであるが、そのやり方が全く気紛れなのである。アテネの守護神アテーナ（Athena）も主神ゼウスも誓いや約束を勝手に破るし、他の神々も人間に悪をもたらしたり争いをもたらしたりする。神は本来善良であるから、このようにホーマーは神々について偽りを語るだけでなく、かれの詩は人間を悪の道に導くかもしれないのである。したがって神が悪の原因なのだということを詩人に言わせないように法律で禁止すべきだとプラトンは考える。

そしてもし詩人がニオベ (Niobe) の苦難について——これらの短長格で書かれた悲劇の主題について——あるいはペロプス (Pelops) 家について、あるいはトロイ戦争、またはそれと同様の主題について語るとき、それが神による作品であると詩人に言わせてはなりません。また、たとえ神による作品であつたにしても、今われわれが求めているようなものの説明について、詩人は若干の工夫を凝らさなければなりません。神は正しいこと、間違いないことを行つたのであり、人間は罰せられた方が一層立派になるのだということを詩人は語らなければなりません。詩人は勝手にしゃべってはならないのです。罰せられた者は不幸であり、その不幸の原因は神であるというようなことは、しゃべってはならないのです。しかし悪人は処罰の必要があるからこそ不幸なのであり、むしろ神罰を受けることがその人の利益になるのだということは、しゃべってよからう。ただ善良なる神が人間に悪をもたらす根源であるという言い方は、強く否定されなければなりません。そして、そういうことは、公序良俗の行われている国家においては、老人であれ若者であれ、何人といえども、韻文であれ散文であれ、語られ、歌われ、聞かされることを禁止されなければなりません。そのような物語は、自殺的であり、破滅的であり、不敬なのです。

(『国家』)

プラトンは、倫理と政治を混同しなかった。かれは、理想的共和国家を建設するための将来の支配者層と保護者層の教育を思うと、そういう大事な教育を詩人たちに委せるわけにはいかなかった。詩人たちは、神々について偽りを吐き、下らぬ行為をする人間を描いている。詩人たちは、家の中で不機嫌にすねる英雄たち、わいろを受けとる王たち、その他信じられないほどの悪事のかぎりをつくす戦士や支配者たちを描いている。特によくないのは、詩人たちが死後の世界を、暗い辛い世界として描いていることだ。これでは喜んで死ぬ気になれない。若者たちは、死後の世界で充分に酬われるという保証があるからこそ、祖国のために勇敢に戦って死ぬ気になるのだ。詩人たちの描く死後の世界は、英雄主義への妨害であり、若者たちを臆病にする。あれでは若者たちが生に執着して死を恐れてしまう。支配者層や保護者層の人たちは、国家の自由を守るために心身を捨てるときであって、邪悪下劣の行為は露ほどもあってはならない。

しかるに詩人たちは、何を描いているか。女、悪人、「鍛冶屋、職人、舟漕ぎ、水夫長その他」の低級な連中ばかりではないか。無知文盲の大衆を喜ばせそうなものばかりではないか。乾燥させておくべきはずの感情に、肥料と水を与えて、いつまでもこれを煽っているのが詩である。「人間が幸福と徳を大きくしようとするなら、感情は支配されるべき立場に置かれるはずのに、逆に詩は感情に支配的立場を与えている。」

模倣を仕事とする詩人がわが国家を訪れるなら、「われわれは、美しい神聖なすばらしい人間と

して、かれの前に平伏して崇拜するが、わが国家には、あなたのような人間の存在を許可してはいないことをお知らせしなければならぬ。詩人の存在は法律によって禁止されている。したがってわれわれは、詩人に香油を注ぎ、羊毛の冠を捧げたけれども、詩人を他国に追放しなければならぬ。」

かくして詩人はプラトンの『国家』から追放されるのである。

では詩も歌も全く存在しないのか。若干の詩と歌の存在は認められている。しかし、それは支配者たちの統制の下に書かれたものだけに限られる。音楽も、立派な軍事訓練に役立つものだけが認められる。しかも、この限られた国家の詩でさえ、誰が書いてもよいということになっていない。現代の言葉を用いるならば、政治的に信頼できる者だけが、詩の創作を許されるのである。しかも、そのかれでさえ、国家の詩だけを書くことが許されているにすぎないのだ。したがって国家の強化に役立つ試合競技に勝利を取めた者だけが賞讃されるのであって、その賞讃の詩も、書く人が決まっているのである。

詩人たちに勝利者を讃美させるのはよいが——詩人なら誰でもよいというわけにはいきません。まず第一に、五十歳以下の人は除外します。たとえ詩才や楽才に恵まれていても、それまでに高貴な立派な行為をなしたことがない人も除外します。しかし国家的にみて善良であり立派で